わが母校「市工」の沿革概要

大正13年、本校の前身である広島市工業専修学校が創立されて、今年で70周年になる。この間、さまざまな変遷を経て今日の広島市立広島工業高等学校へと発展してきたが、同窓の輪を広げるためにもその大まかな沿革をたどってみたい。

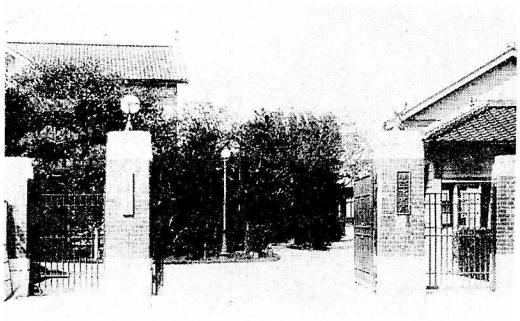
創立時から終戦前まで

大正13年10月、勤労青少年のための夜間の実業補習学校として修業年限３年（予科１年、本科２年）の「広島市工業専修学校」として創立された。当初は、機械・電気・土木建築の３科で120名定員で発足したが、正式な授業が開始されたのは翌14年の４月（予科は９月）からである。校舎は千田町の広島工業高等学校（後の広島高専→広大工学部）を使用し、昭和２年からは土木と建築が分れて４科となり、創立５年後には生徒数も200名と増えていった。

昭和10年、国策による青年学校令の施行で、校名が「広島県広島市立工業専修青年学校」と改称された。そのときから生徒全員に軍事教練が行われるようになり、満州事変以後の戦争が激しくなる前ぶれの様相を呈し、訓練等は一段と強化された。

昭和12年には実業学校として文部省から認可され、新たに「広島市工業学校」として発足した。翌年には工業化学が増設されて５科となり、修業年限も４カ年とする夜間工業高校へと発展していった。その後、昭和16年に昼間の第一工業学校（戦後廃校）が設置されたので、「広島市立第二工業学校」と改称された。

〔千田校舎全景〕



〔専修学校時代の正門〕

鋳造品の高等学校の門札（右）と共に市工専の門札（左）が見られる。

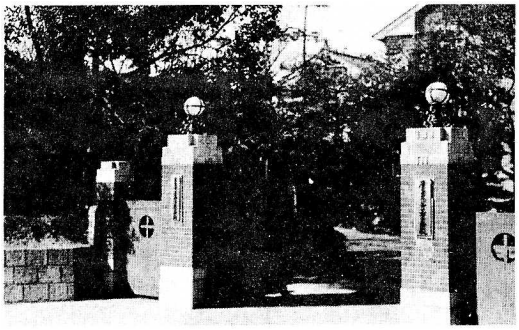
日中戦争の戦火が広がる中で本校の卒業生を次つぎと召集され、昭和12年～昭和15年までの３年間に、青春も謳歌できないまま若い命を奪われた卒業生は20名にのぼると記録に残されている。さらに昭和16年の太平洋戦争開始後、高学年のクラスから応召されたり、少年兵などに志願したりして戦地へ趣く生徒が日増しに多くなっていったが、何人の生徒が戦争の犠牲になったのか定かではない。

原子爆弾の投下と本校

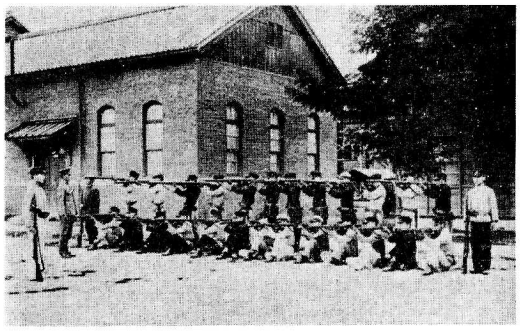
昭和20年８月６日、一発の原子爆弾は広島市内のほとんどを焼きつくし、推定20万人余の尊い命を奪っていった。千田町の広島工業専門学校にあった本校は爆心から約2100mの位置にあり、爆心に面した正門右手の市工専用校舎と工事北側の校舎は全壊した。しかし、大破したが倒壊しなかった校舎もあり、さいわいなことに大きな火災も発生しなかったので焼失をまぬがれた。

当時は臨戦体制のもとで、昼間の中学校や女学校などは学徒動員にかりだされていて夏休みもなかった。しかし、夜間の本校は学徒動員もなく当日は夏期休業中であったが、当然なことに昼間は軍需工場なども含めたいろんな職場で働いていた。記録によると、在籍生徒数は500名余、選任教職員は12名で、原爆の投下時には、生徒も教職員も学外の職場や家庭にいて被爆した。そして、生徒の死亡者51名・重軽傷者65名、教職員の死亡者１名・重軽傷者３人と記録に残されている。

ちなみに、本校と同じ校舎を使っていた広島工業専門学校の場合、在校生と教職員900余名のうち、死者・行方不明88人、重軽傷519人と記録されている。



〔広島市立第二工業学校時代の校門〕
門扉や門札の供出のために木製の物に変遷した。



〔戦時体制下の教練〕

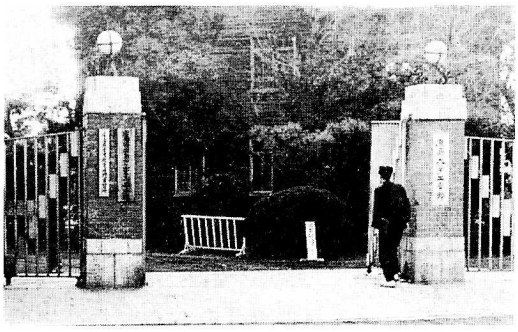
戦後の復旧と学制改革

原爆投下１カ月後の９月、ともかく２学期の始業式を行ったが、集まってきた生徒は約160名ほどで、破壊された千田町校舎の跡かたずけ作業から始まった。実際に授業が再開されたのは11月からであったが、倒壊をまぬがれた校舎の一部をかたずけ、窓わくも電灯もない教室で、食べ物もなく空腹をかかえての仮授業は、午後の２時から６時までの昼間に行われた。

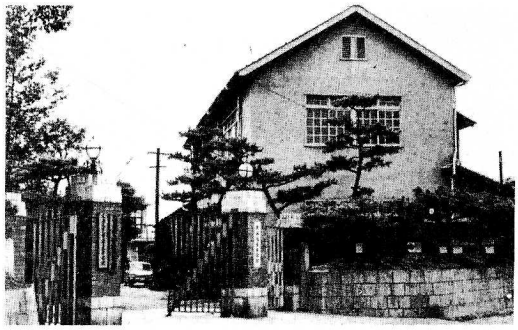
工事の授業も３年生から再開されたが、1,000名をこえる学生全員を収容しきれる状態ではなく、旧海軍の施設などを使うことが決まり、呉市広町へ移転した。やむなく本校も一時、東雲にあった第一工業学校の校舎を借り受けて授業を続行したが、地理的に交通便が悪く、再び千田町の旧校舎へ帰ることになった。しかし当分の間は教室が不足し、青空教室での苦しい授業をよぎなくされた。その後、工専も旧校舎へ帰ることになって復旧工事が始まり、昭和22年１月に一応の工事が終わり千田町校舎での本格的な授業が再開された。この間、原爆による被害や生活上の諸事情などで通学をあきらめ、本校を去って行った生徒もいたが、その数は定かではない。

昭和23年５月、「６・３・３制」の学制改革で「広島市中央工業高等学校」と改称されたが、翌昭和24年４月には地名をとって「広島県広島千田高等学校」へと再び改称された。そして教職員や生徒定員も増員され、専任教員26人、講師42人、生徒定員800名（当時の在籍525名）の工業高校として再出発した。

千田高校時代はまだ戦後復興の初期であったが、旧工専→広大工学部の校舎などを使っての授業だったので、当時は他校と比べて実習の施設等も整っていた。しかし、窓ガラス



〔広島県広島市工業高等学校時代の正門〕
木製の門扉から鉄製の門扉へと変遷をみているが、門札は木製のままである。



〔千田校舎時代の正門と本館〕

のない所には新聞紙を貼り、食堂で売っているコッペパンと給食の脱脂粉乳で何とか空腹を満たし、冬には払い下げのオーバーなどを着ての授業が続いた。また、学制改革による過渡期だったこともあって、４年制の旧第二工業の卒業証書を受けてもう１年間通学し、昭和25年３月に第一回卒業生が巣だっていった。

全日制・定時制の工業高校へ

昭和29年４月、総合高校再編成の中で職業科が単独校へ移校されるに伴い、本校も「広島県広島市工業高等学校」に改称された。

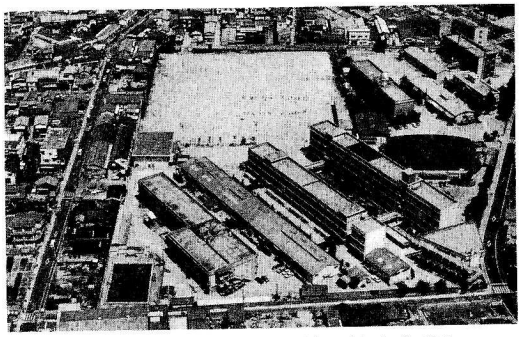
その後、独立校舎新築の声が次第に出され、昭和36年に移転設置の陳情が関係方面へ提出された。そして、昭和39年３月末に仁保町本浦（現在の東本浦町）への移転が完了し、名実ともに独立した校舎や施設をもつ工業高校となった。

移転と同時にその年４月の新学期から、全日制が新設されて機械・電気・工業化学の３科、定時制はこれまでどおり機械・電気・土木・建築・工業化学の４科で、今日の「市工」が発足した。その後、本館・実習室・専門教科棟・屋体・プール・普通教室の増築工事などが次々と行われ、今日のような規模に発展してきた。

昭和55年４月、政令都市への移行にともなって現在の「広島市立広島工業高等学校」と改められ、今年４月現在では教職員は全日制121名、定時制62名、生徒数は全日制は8科929名（内女子生徒89名）、定時制は4科237名（内女子生徒12名）と「西日本随一の工業」へ発展している。また、市工の卒業生は、今年までに14,371名（全日制7,949名、定時制6,422名）の卒業生が巣立っている。

※参考文献～広島市立学校沿革史・広島原爆戦災誌・創立60周年記念誌・学校要覧

〔東本浦町移転の正門と本館（昭和39年）〕



〔東本浦町の校地拡張前の校舎全景〕